

# ふるさと再発見 第53回

Rediscovery Omihachiman

まちのなまえ②

## 「老蘇」

### —老蘇の森・奥石神社—

今回は、「老蘇」地域の名前の由来を紹介します。

この地域は、江戸時代に東老蘇・西老蘇・内野・石寺の4つの村があり、明治22（1947）年にこれら4つの村と清水鼻村（現東近江市五個荘清水鼻町）が合併し、「老蘇村」となりました。新しい村名は、古来より名高い「老蘇の森」に由来して名付けられています。

老蘇の森は、万葉の時代からすでにその名が知られる場所で、明治24（1949）年に国史跡に指定されました。また、当森は歌枕の地としても有名で、万寿元（1024）年、大江公資

が相模守に任じられ、任地へ赴く途中にこの地で詠んだ「あづまぢの、おもひでにせんほどとぎす、おいそのもりの、よはの「こゑ」をはじめとして、ホトトギスや思い出、老いの哀しみを森に掛けたものなど、当地を詠んだ和歌が数多く残ります。

この森がいつ頃からあるのかということは、はっきりとは分かりませんが、至徳元（1384）年9月の奥付を持つ『奥石神社本紀』には、次のような伝承が残っています。「昔老蘇の森一帯は、地裂け、水が湧き、人の住める場所ではありませんでした。しかし、石辺大連とい

う人物が松や杉や檜の苗を植え、神々に祈願すると、たちまち大森林になった」といわれています。これが老蘇の森であり、石辺大連が生きながらえて百数十歳の年齢を重ねたため、老が蘇の字を当てたとも伝えられています。「老蘇」という字のほか

に、『新古今和歌集』では「老曾」、「源平盛衰記」では「追初」という形で表現されています。

この森の中には、「奥石神社」が鎮座しており、老蘇の森を鎮守の森としています。奥石神社は、『延喜式』神明帳に載る式内社で、近世には鎌大明神・鎌宮と称されていました。大正13（1924）年に『延喜式』にちなみ、現在の名称に改名しました。

老蘇の森の伝承を記載する『奥石神社本紀』によれば、一帯が大森林となった際に石辺大連が社壇を築き、崇神天皇の代に四道將軍・吉備津彦が社殿を造営したことが、当社の始まりであるとされています。本殿は、三間社流造の檜皮葺

で、棟札の写しから天正9（1581）年の建立であると考えられています。また、本殿の西側に建つ諏訪社本殿は、一間社流造の檜皮葺で、具体的な年代を示す史料は見つかっていませんが、様式などから17世紀前期の建立であると推定されています。本殿は、明治35（1902）年4月17日に国の重要文化財、諏訪社本殿は、平成15（2003）年3月7日に安土町指定文化財（現近江八幡市指定文化財）に指定されました。



奥石神社本殿（右奥）・諏訪社本殿（左奥）

広報おうみはちまんは、各自治会を通じてお届けします。また、各学区コミュニティセンターや図書館などの公共施設、郵便局、金融機関、セブン-イレブン・ファミリーマート各店舗などに置いているほか、市ホームページやマチイロ、マイ広報紙などでもご覧いただけます。

### 人口と世帯

令和5年4月1日現在  
( )は前月比

|    |          |        |
|----|----------|--------|
| 総数 | 81,669人  | (-186) |
| 男  | 40,126人  | (-92)  |
| 女  | 41,543人  | (-94)  |
| 世帯 | 35,195世帯 | (+82)  |

※外国人住民(43か国・地域/1,805人)を含みます。

Facebook



YouTube



Instagram



マチイロ



マイ広報紙



LINE

